

1 自然神学から公共神学へ

1 環境論とキリスト教思想

- 環境・経済・政治 -

1 - 1 : 環境論と聖書解釈 - 創造論から終末論へ -

- (1) 論争の舞台としての創造論
- (2) 創造論から終末論へ
- (3) 環境論にとっての聖書の意義

1 - 2 : 経済的政治的な問いとしての環境論

- (1) キリスト教思想と環境論との積極的な結びつきとその条件
- (2) 環境論と政治・経済とのリンク キリスト教的な公共性論の構築
- (3) John B. Cobb, Jr.: Christianity, Economics, and Ecology
- (4) Larry Rasmussen, Global Eco-Justice: The Church's Mission in Urban Society

2 生命論とキリスト教思想

- 生命・経済・政治 -

2 - 1 : 脳死論、そしてクローニング

- (1) 生命倫理の諸問題
- (2) 生の次元論から脳死論の宗教的次元へ
- (3) クローニング

2 - 2 : 自己決定論と共同体論

3 コミュニケーション論としての自然神学

3 - 1 : 自然神学とは何か

- (1) 通俗的な理解に対して
- (2) プルトマンの自然神学論
- (3) 自然神学の歴史
- (4) 広義と狭義の自然神学

3 - 2 : コミュニケーション合理性と自然神学

- (1) 自然神学は何を意図しているのか - 証明? あるいは何? -
- (2) コミュニケーション的行為としての自然神学

13. まとめ

すでに指摘したように、キリスト教自然神学の問題を論じる場合、二つの意味を区別することが必要である。まず、広義の自然神学であるが、これは、キリスト教神学（キリスト教思想）が他の諸学科とコミュニケーションすることを可能にするインターフェイス全体を意味している。この意味での自然神学は、キリスト教思想において自然的理性の働く場と考えることが可能であり、キリスト教神学は、置かれた状況の多様性に応じて、様々な対話の場を合理的に設定できるだけの可能性を自らの内に有しているのである。次に、狭義の自然神学であるが、これは西欧キリスト教思想において現実的に展開された「自然神学」の具体的形態を意味する。それは、西洋のキリスト教思想史において、創造信仰に基づき、また「二つの書物」論や「適応の原理」などを介しつつ、自然認識（自然学あるいは自然科学）と神の存在や神の意図についての認識とを媒介する機能を果たしてきた。神の存在論証はその典型である。

自然神学（狭義の）とくに神の存在論証は信仰（創造信仰）を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。この点で、バルトの自然神学批判にもかかわらず、バルト神学が自然神学に適切な場を与え得るものであるとする、トランスの指摘は正当である。また、こうした議論のコンテクストを構成するその信仰内容から完全に切り離してそれだけで分析されるとき、個々の論証に対して様々な論理的欠陥が指摘されるのは当然と言わねばならない。

自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学（広義）はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。以上の二つのコミュニケーションの区別は、ペリカンの議論において確認した、「弁証としての自然神学」と「前提としての自然神学」の区別に対応するものである。この区別の存在を含めて、現代に思想状況における自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは、自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えるという点であろう。

しかし、繰り返すように自然神学による論証は無神論者の回心に関しては無力である。その場合、それは論証というよりも、説明ないしは告白にとどまる。論証と信仰との関係において、信仰から論証への運動はいわば自然に生じるとしても、論証から信仰への移行の方は、自然神学だけでは説明できない複雑な諸要因の存在を念頭に置く必要がある。つまり、信仰は、知的論証（知識・認識）、意志的決断、感情的関与が相互に絡まりあった一つのプロセスとして理解すべきであるように思われる。

自然神学の可能性の問いは、キリスト教信仰の可能性の問い(あるいは宗教の可能性)とも無関係ではない。というのも、先に論じたように自然神学(広義の)が信仰の合理性に関わっているとすれば、それが神学体系の中に確かな場を確保できるか否かが、その神学とそれを生みだした信仰の合理性を左右することになるからである。もし、キリスト教信仰が完全な非合理性を表明するのであるとすれば、自然神学におけるような信仰の合理性の問いは無視できよう。しかしその場合、キリスト教とは現代人にとっていかなる存在意味を有することになるのであろうか。非合理性に開き直るキリスト教は特殊なカルトあるいはセクトとしては存続できるとしても、おそらく歴史的キリスト教からは完全に逸脱したものになってしまうであろう。自然神学の再構築は現代キリスト教思想にとって重要な課題の一つなのである。

(3) コミュニケーション合理性に向けて

14. 自然神学：弁証あるいは論争の合理性の場の確保

15. 共有され相互に承認された合理性、これは具体的なコミュニケーション行為において繰り返し確認され確保されねばならない(コミュニケーション合理性)。

これは、公共性の領域の成立にとっても決定的な意味を持つ

16. 意味世界の構造：主観的、客観的、そして相互主観的

17. 神学と諸科学、キリスト教諸教派間、キリスト教と諸宗教

対話、合意、討論。最悪の対立・衝突を回避する条件(必要) cf. 共に生きる意識の共有

4 自然神学から公共神学へ

4 - 1 : コミュニケーション論の拡張の可能性

(1) コミュニケーションの可能性と現実性

- ・ 必要性を前提にして
- ・ コミュニケーション合理性の基盤としての自然的理性
- ・ コミュニケーションの手続き

(2) 弁証としての自然神学 弁証神学を手がかりに

- ・ 弁証神学とは何か
 - 批判に答えるという課題
 - 古代の弁証家たち
 - だれに向けられた神学か(神学の受け手)

(3) ティリッヒの二つのモデル

「形式 - 内実」: 学の体系	知の分析(合理性の共有)
	相補的
	合理性の歴史性
「問い - 答え」: 対話構造	相互理解・合意形成(合理性の生成)

1. 「内実 - 形式」モデル

- ・意味の形而上学：意味経験の現象学
知の構造から学の体系へ
- ・シュライアマッハー トレルチ ティリッヒ パネンベルク
- ・諸学問の体系における相互関連
共通の知の理念・合理性の共有 神学の合理性
しかし、神学の独自性・自立性は？
cf. 弁証法神学

2. 「問い - 答え」モデル

- ・存在論的人間学：「神」の問いの普遍性
解釈学：キリスト教的象徴を問いに対する答えとして解釈
キリストとしてのイエス (as, als)
- ・初期の弁証神学 中世における討論の伝統
ソクラテス的？
- ・現実の対話・コミュニケーションのプロセスにおいて
語用論的分析
ハーバーマス：理想的発話状況と先取り
レヴィンソン：協調の格率
- ・合理性の共有（合意形成）を目指して。合理性は前提ではなく目標である。
神学の独自性
しかし、何が合意形成を保障するのか

3. 自然神学の原理としての自然的理性は、諸学の体系の共通基盤であると同時にコミュニケーション合理性の根拠でもある。

モデル1から、モデル2を通して、再度モデル1の形成を試みる、というプロセス。
（神学の仮説性）

（4）挑戦としての弁証 - 論破する弁証 -

- 4. 「弁証」とは、単なる受け身の自己弁護ではなく（近代神学の行き詰まり）、積極的に相手における問題性を露わにして、それに答えること。問いの共有における討論。

5. 問いの共有 同一の状況・歴史を生きているという経験

cf. sence of meeting

< 文献 >

- 芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社 1995年
「宗教的認識と新しい存在」『哲学研究』第559号 京都哲学会 1993年、
pp.33 ~ 72